方向

第一三七号　一九九一年一〇月二八日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

小さな願い

―法華経巡礼　66―

1991 10 10　原田憲雄

4-22. 求めていても、あるときは何かを手に入れるが、そうでないこともあり、
痩せこけて、他国をさまよい、愚かな男は、体中、吹出物やカサブタにまみれていた。（12）
かれは、父のいるその町にたどりつき、次第に近づいていったとしよう、
食べ物や着物を求めながら、自分の父の屋敷のあるところへ。（13）
大きな財産をもつこの長者は、門のところで獅子座に坐っていて、
幾百の多くに囲まれ、傘蓋（さんがい）がかれのためにひろげられている、空に。（14）
かれのまわりには側仕えの人たちがいて、ある者は財産や黄金を勘定し、
ある者は帳簿を記入し、またある者は金利をとって貸し出している。（15）
その貧しい男は、そこに、立派な長者の屋敷を見て、
「どこに今わたしはやって来たのだろう。この人は、王か、王のような者らしい。（16）
わたしはここで災難にあい、捉えられて、むりに働かされるかもしれぬ」
そう考えて、あの男は逃げ出した、貧しいひとたちの巷を求めて。（17）

その長者は、自分の息子を見て、獅子座に坐っていて、毛が逆立つばかり歓喜し、
男のところへ使いをやる「あの貧しい男をつれてきなさい」と。（18）
たちまちかれらはその男を捉える、捉えられるとすぐ、男は気絶する、
「きっと、殺し屋がおれのところへやってきたのだ、着物も食べ物も何になろう」と。（19）
かれの様子を見て、聡明な長者は、「この愚か者は、無知で、願いが小さく、
この立派な屋敷が自分のものとも、これが自分の父だとも、信じられないのだろう」（20）
長者はそこで言いつける、浮浪者や、すがめの不具者、
ぼろ着や、色黒の、下級の連中に、あの男を誘ってきて、働かせるように。（21）
「糞や尿でよごれた、この、おれのところの不浄を、
汲み取るために、働け、二倍の賃金をやるから」（22）
こんな言葉を聞いて、あの男はやって来て、その場所を掃除し、
そこでかれは、屋敷のそばの藁小屋に住まいするようになるだろう。（23）
あの長者は、その男を、窓や覗き穴から、いつも観察する、
「願いの小さな、わたしの息子が、不浄を掃除している」と。（24）
長者は、降り立ち、もっこを持ち、汚れた着物をきて、
その男の傍に近づき、叱責する「仕事をしていないな」（25）

pariyeṣamāṇo 'pi kadā-ci kiṃ-cil labheta kiṃ-cit puna naiva kiṃ-cit /
sa śuṣyate para-saraṇeṣu (w:śaraṇeṣu) bālo dadrūya kaṇḍūya vidigdha (ca digdha) -gātraḥ //12//
so ca vrajet taṃ nagaraṃ yahiṃ pitā anupūrvaśo tatra gato bhaveta /
bhatkaṃ ca coḍaṃ ca gavesamāṇo niveśanaṃ yatra pitu svakasya //13//
so cāpi āḍhyḥ puruṣo mahā-dhano dvārasmi siṃh 'āsani saṃnisaṇṇaḥ /
parivāritaḥ prāṇi-śatair anekair vitāna tasya (w:tasyā) vitato 'ntarikṣe //14//
āpto janaś cāsya samantataḥ sthito dhanaṃ hiraṇyaṃ ca gaṇenti ke-cit /
ke-cit tu lekhān api lekhayanti ke-cit prayogaṃ ca prayojayanti //15//
so cā daridro tahi etu dṛṣṭvā vibhūṣitaṃ gṛha-patino niveśanam /
kahiṃ nu adya (w:adyo) aham atra āgato rājā ayaṃ bheṣyati rāja-matraḥ //16//
mā dāni doṣaṃ pi labheyam atra gṛhṇitva veṣṭiṃ pi ca hārayeyam /
anucintayantaḥ sa palāyate naro daridra-vīthīṃ paripṛcchamānaḥ //17//
so cā dhanī taṃ svaku putra dṛṣṭvā siṃh 'āsana-sthaś ca bhavet prahṛṣṭaḥ /
sa dūtakān preṣayi tasya antike ānetha etaṃ puruṣaṃ daridram //18//
samanentaraṃ tehi gṛhītu so naro gṛhīta-mātro atha (w: 'tha) mūrccha gacchet /
dhruvaṃ khu mahyaṃ vadhakā upasthitāḥ kim adya (w:kiṃ mahya) coḍena tha bhojanena vā //19//

dṛṣṭvā ca so paṇḍitu taṃ mahā-dhanī hīnādhimukto ayu bāla durmatiḥ /
na śraddadhī mahyam imāṃ vibhūṣitāṃ (w:vibhūtāṃ) pitā mamāyaṃ ti na cāpi śraddadhīt //20//
puruṣāṃś ca so tatra prayojayeta vaṇikāś ca ye kāṇaka kuṇṭhakāś ca /
kucaillakā kṛṣṇaka hīna-sattvāḥ paryeṣathā taṃ naru karma-kārakam //21//
saṃkāra-dhānaṃ imu mahya pūtikam uccara-prasrāva-vināśitaṃ ca /
taṃ śodhanārthāya karohi karma dvi-guṇaṃ ca te vetanakaṃ pradāsye //22//
etādṛśaṃ ghoṣa śrutvitva so naro āgatya saṃśodhayi taṃ pradeśam /
tatraiva so āvasathaṃ ca kuryān niveśanasyapali (w:niveśanasyopari kuñcikesmin //23//
so cā dhanī taṃ puruṣaṃ nirīkṣed gavākṣa olokanakehi (w:olokanake 'pi) nityam /
hīnādhimukto ayu mahya putraḥ saṃkāra-dhānaṃ śucikaṃ karoti //24//
sa otaritvā piṭakaṃ gṛhītvā malināni vastrāṇi ca prāvaritvā /
upasaṃkramet tasya narasya antike avabhartsayanto na karotha karma //25//

身体の傷害や皮膚の色にたいする侮蔑的な言葉が、これまでにもあり、これからも出てくる。わたし自身、そのことが不快であり、問題とする論考も出ている。しかし、これは『法華経』が成立した時代・地域における社会の通念が反映しているので、今の通念やわたしの感情によって、訳語を潤色することはしない。

※前号正誤　一〇頁二行　4-18.→4-20.　四行　4-20.→4-21.

歌人・大塚五朗（二八）

原田憲雄

1991 10 15

若葉の庭

一九四一年（つづき）五朗、四十四歳。

『水甕』昭和十六年六月号。

折々

鹿おどす添水の音の谷越えてここに寒けき午後の日のてり　（庭八四　水尾村四首）

無為をこそたのめと思ふあけくれの老いづきそめしわれを恥（やさ）しむ　（庭一〇b五・風土三五）

夕風はまだ明るくてひるがへる陸軍病院の日の丸の旗

野の道にわれ一人なるたのしさをまともの比叡に対（む）きて歩めり　（庭六七）

山の池にしらじらと日象（ひかげ）うつりゐて葦間を通ふ風先のゆれ

『水甕』七月号

五月の抒情

坂にそひて風の流るるひそけさを樟の落葉は青々と散る　（庭六七）

坂の上は風の流るる〈ながるる〉空ありて若葉の昼のまだ晴れきらぬ　（庭六八）

地に落ちておのれ影保つ〈翳（かげ）もつ〉花びらの五月は牡丹のやさしかりけり　植物園（〃〃）

一日の終りの風が寄る故にあかあかとして咲きぬ牡丹は　（〃〃）

さりげなく男女（ふたり）別れてゆきしかば噴水は五月の空を濡らせり　（〃〃）

『水甕』八月号。

金閣寺泉石

わが捨てし煙草のけむりしばらくはありて若葉の庭も昏れきぬ　（庭八五・金閣寺四首）

春蟬がすでに鳴きゐる林泉（しま）にして松（杉）の花粉を爆る風あり　（〃八六）

夏五月椎には椎の花が咲き豊けかりけり義満の眼（め）は　（〃〃）

椎の花こぼるる池はまひるにて水皺の光（てり）を縫ひて行く鯉　（〃〃）

すでにおびただしき蟻のゆききをあらしめて若葉の光（てり）の恣なる庭　（〃〃）

八月二十五日消印の原田宛葉書にいう。

君の曽遊の地、紀州大崎にやつて来た。全く静かです、チヌ釣の舟が弁天島の近くに五六艘浮かんでゐるだけ、岬端の村はすでに秋です。……今日はこれから蜜柑山を越えて塩津に出るつもり　多分廿七日頃は帰洛の予定です

「君の曽遊」とは、一九三七年に、森田曠平と原田憲雄が、一月五―九日の間、大崎・印南・岩代・周参見・串本をめぐった旅行をさす。大崎は関西の画家が好んで写生した、景色のよい、小さな湊町であった。

『水甕』九月、十月号の詠草は残っていない。九月二十一日、右京区花園の法金剛院での京都支社歌会での五

朗の詠草は、

夜霧すでに秋とし思ふすべなさを寝返り寒き月の痩せやうよ

九月、西の研究会が発展解消し、五朗を中心とする「一艸舎」が結成され、同人を同行とよび、十月の半ばか十一月の初めごろ、雑誌『艸』が創刊される。その『艸』が、持ち寄った原稿を綴じただけの回覧雑誌であり、戦時・戦後の混乱のなかで保存者も不明のまま、印刷された特別号数部のほかは散逸したため、結成の正確な日はわからない。翌一九四二年一月二十七日に印刷発行した第三号（特別号）のあとがきに原田が「歌集『山原』がMとHを先生の門に導いた日から、金曜会の後をうけて水甕西ノ研究会を続けた後、広く文学に生きる同行が一艸舎を結んだ昨年の九月までには五年の歳月を経てゐる」としるし、同行名簿に次の二十名をつらねている。

大塚五朗・大塚朗・大塚喜子・高田益雄・浪江富佐子・原田憲雄・宮崎篤三郎・加地富子・川見すみ子・平野謙三・勝見ふみ子・田中千章・森田曠平・赤谷明海・木本美津子・岡本和気子・高田平二朗・柴野純・杉田荘作・田中千美。

十月一日、五朗の随筆集『嵯峨野の表情』の再版が発行された。

『水甕』十一月号。

夏痩せてわがあることもすがすがと蚊帳に来て鳴く馬追を聞く

夏草のすでに靡かふ道を来て風巾のなかの比叡にまむかふ

どの家も昼寝の人のながながと夏はかくても人のしづけさ

（統風十三三）

昏れてなほ明るさ保つ岬端のややにさはだつ松風の音

かへり来る舟のなければひと色に昏れて涼しき青海の色（いろ）　（庭九・〃　〃）

『水甕』十二月号。

紀州大崎

朝よりの晴れは秋めく暑さにてこれはまたおびただし蟬のなくこゑ

山裾の（に）乏（貧）しき家をあらしめて午後は海より風の吹く村　（〃〃・〃　〃）

満ち潮の満ち極れば大空を渡り終へたる日を湿（しづ）ましむ

夕べすでに海吹く風はひろくして青潮の上に二つ浮く鳥　（〃〃・〃　〃）

風だちて一日のはての海青し晴れたる空の夕焼もせぬ　（〃九・〃　二三四）

十二月八日、アメリカとイギリスに対する宣戦が布告され、太平洋戦争が始まった。翌年三月卒業予定の大学生は、この十二月末日に繰りあげ卒業することとなり、十日前後に徴兵検査があり、一艸舎の同行のうち大学卒業年次の柴野・高田・原田の三人は第二乙種で陸軍に現役入営と決定した。

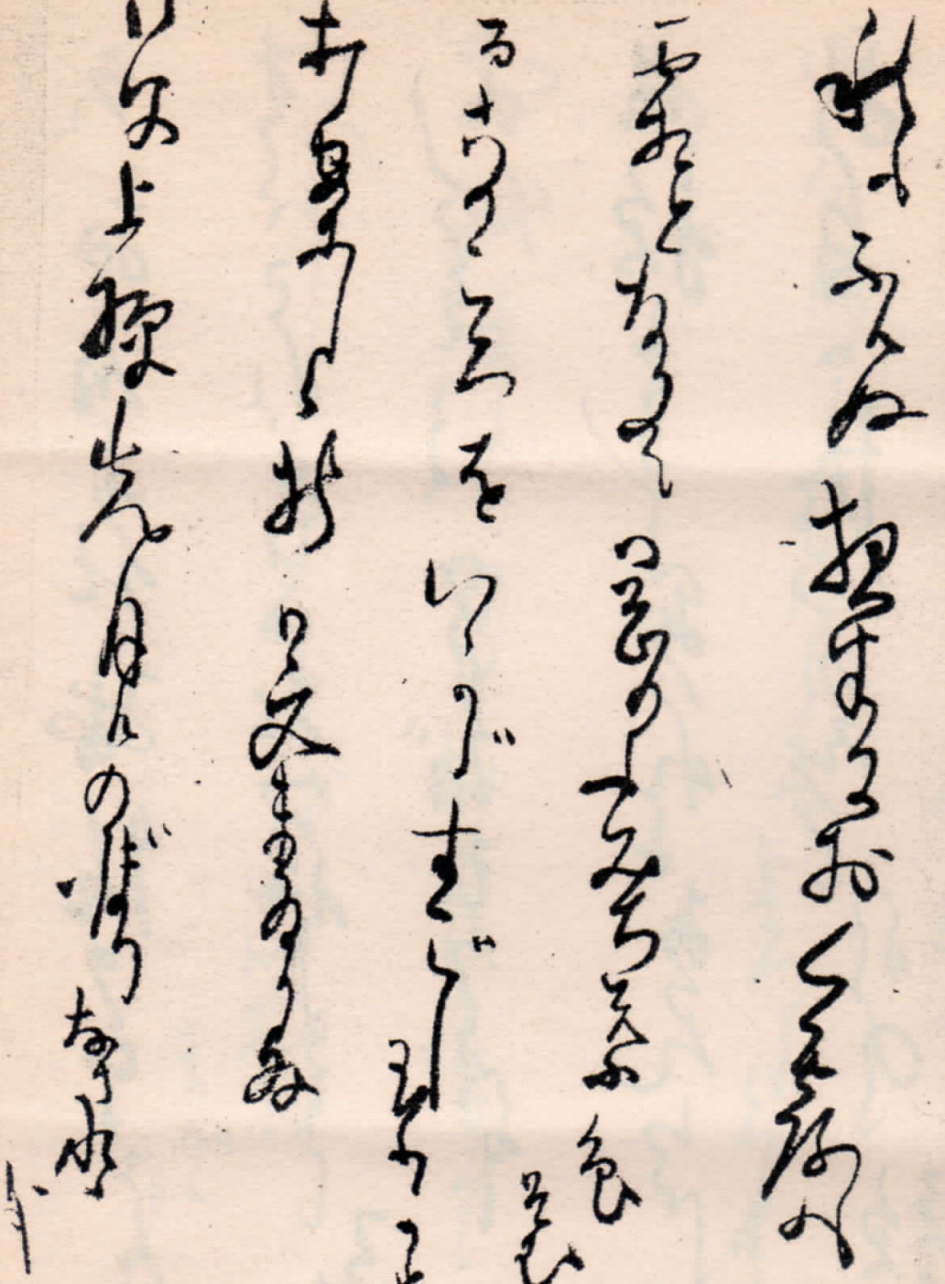
十二月二十二日消印、五朗の原田あて葉書に、

廿五日の会、杉田君の送別会ともいふべきもの、出来る事なら全部の顔を揃へたいものと思つてゐますが、どんな調子でせうか。……

とある。杉田は第三乙種予備役で、東京の日本電気株式会社に就職し、まもなく赴任することになっていた。

中野逍遥の手紙（七）―春夢女史周辺 八―

1991 6 14　原田憲雄

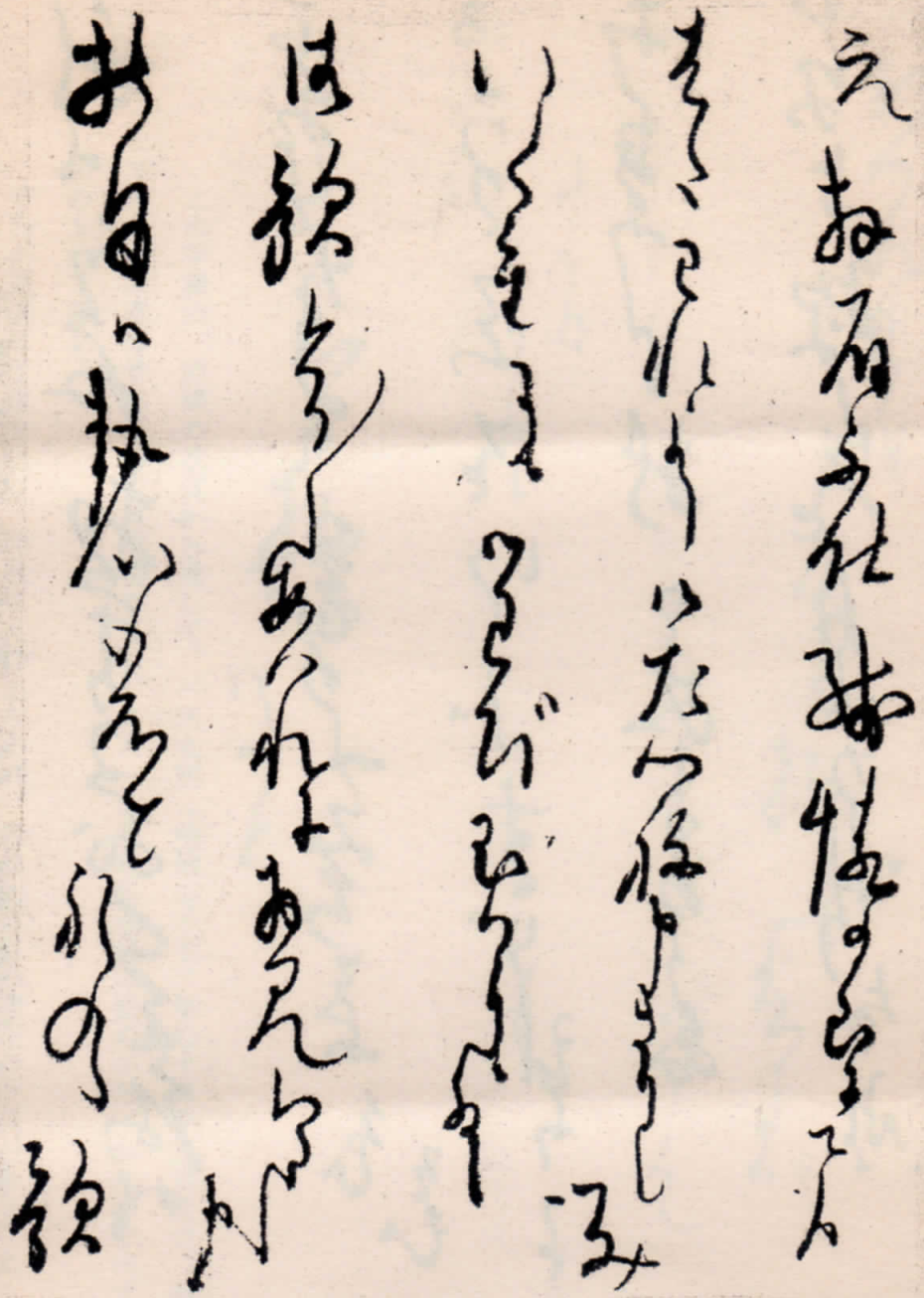


秋もふけぬ　夜半に
おく露は

霜となりて　岡の
もみち葉　色にそむ
る　このころを

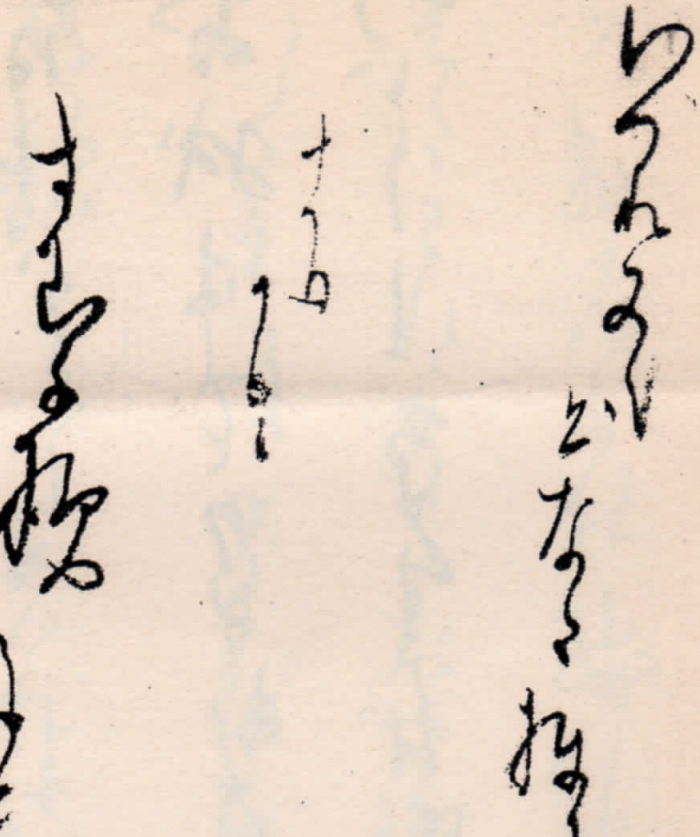
いかゞすごし玉ふかと
打案し候折
御文まゐりぬ

御父上様　先月
御のぼりなされ候よし



え拝眉不仕
残懐の至りにて候
はた己れより御たつね
申〈さ〉さりしつみ
いく重にも
御わび玉はり度候
御歌とりゞゝあはれに
拝見いたし申候
折角　御執心のほど
祈入候　　歌

も御遠慮なく
会田うじに
御なほし玉はらば
よろしくと
存じ上候
別紙　御もとの事
おもひ合せて
つゞりし筆すさび
御笑ひ
までに候

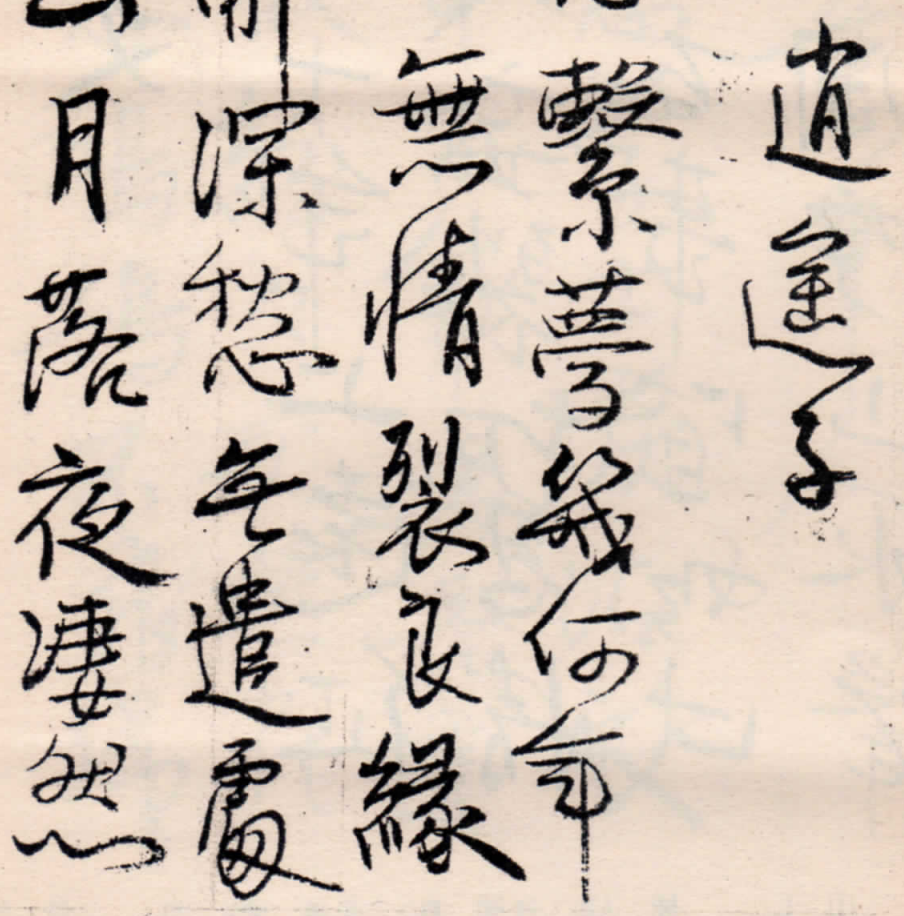


いづれ又々
どなた様にも
よろしく
かしこ
十月十五日　重
すむ子様
御もと

この手紙は、前後の状況から推して、一八九四（明治二十七）年の十月十五日付で、中野逍遥が坪井すむに宛てた手紙の現存するものでは最後のもの。この一か月後に逍遥は死ぬから、かれのすべての手紙でもほとんど最後のものである。

すむが逍遥に手紙を出し、和歌さえ添えたのは、九月七日付の逍遥の手紙があまりにも心こもり、和歌もまた情が深かったからであろう。「会田うじ」とは、旧派歌人の会田安昌であろうか。それならば宮内省御歌所に仕え、一八九五年、六十四歳で死んでいる《人》。

「別紙」はよくわからぬが、次のものがあるいはそれであろうか。



逍遥子

相思　夢を繋ぐ
幾何の年ぞ、

天地　無情
良縁を裂く。

万斛の深愁
遣る処なし、

西山　月落ちて
夜　凄然。

又

抱憶十年上遠征
皇天妄裂切思情
人生百事皆如此
不苏閑吟山水聲

又

憶いを抱いて十年
遠征に上る、
皇天　妄りに裂く
切思の情。
人生　百事
皆　かくのごとし、
しかず　閑かに
山水の声に吟ぜんには。

意中人

遥思学士淚沾衣
心事百年與吾違
堪厭紛々交燕雀
最悲鴻鵠不飛歸

意中の人

遥かに学士を思うて
涙　衣を沾す、

心事　百年
吾と違う。

敢てするに堪えんや
紛々　燕雀と交わるに、

最も悲し　鴻鵠の
飛びて帰らざる。

この三首は、はじめわたしは春夢女史の作かと憶測した。田中みどりさんが、女史の手跡を示し、かつ女史は漢詩を作らなかったことを教えられた。その後、逍遥の手紙の文字に親しむにつれて、三首もまた逍遥の筆と考えるようになった。そうして最後の手紙にいう「別紙」に当るであろうことに気づいたのである。

前の二首は逍遥の心情をさす。第三首がわかりにくいが、題の「意中の人」とは、逍遥にとっての意中の人、坪井すむをさし、第三首全体は、すむの心境をすむに代わって歌っているのであろう。第二句の意は、逍遥の方ではすむを恋人と呼ぶが、わたしすむは初めから逍遥を友人として、兄弟にちかい人としてきたので、その気持に違いがあった、というのであろう。第三句は、しかし燕雀のようなつまらない人達と交友する気にはなれない、というほどの意。結句は、といって鴻鵠のようなすぐれた人は去ってもはや帰らない、それが悲しい、というのであろう。「悲しい」ということばには「帰ってきてほしい」の意も含ませうる。「鴻鵠」が逍遥をさすことは明らかだから、第三首は、すむが逍遥に宛てた手紙とそこに記された和歌のこころを漢詩に翻訳したのかもしれず、すむの心がこのようであってほしい、という逍遥の願望を託したものかもしれぬ。その「鴻鵠」がまもなく死ぬことを逍遥が知っていたとすれば、これは遺言であり、『誰が罪』の岡野が倭文子に宛てた最後の手紙にあたる。逍遥が知っていたのでないなら、この句はいわゆる「讖をなし」不吉な予言となったことになる。

これらのことの真相は、さまざまに憶測し、推察することはできても、ついに憶測・推察を出るものではなく、確かなことはもはや知りえない。逍遥が、死によって悲しい「艶生涯」から消えても、のこされた坪井すむは、重苦しい追憶をふり捨てもできず、命終の日まで長い道を歩かねばならぬ。

孤山雁信

―赤谷明海書翰集―　（補遺　二）

原田憲雄編

★1974 4 21　原田憲雄宛。手紙。封筒。

おはがき拝見、電話をいただいた由、家内がいないと聞えないことが屢々、失礼しました。

白い蓮は東大寺蓮、紅いのは西大寺蓮と〈唐〉招提寺では名づけてきました。別々の鉢に植えて下さい。根がぐるぐる周辺を回りますから　真中にニシン一本か半本をつきさしてやれば　肥料は十分です。日当たりのよい所におき　ほっておくのが一番。花芽が出てきて　少しでも触れると　咲きません。

人文書院から　御著「日本漢詩選」到来しました。次から次といただくばかりで此方からお送りするものがなく恐縮かつおはずかしい事です。

ざっと拝見しましたところ、日本人のものだけに身近に感じられ、これは読まねばいかんなと思わされました。訓読を添えられたこと、或いは君の本意ではなかったかもしれませんが、通俗性をもたすためにも親切でよかったと思います。

最後の詩、摘草又摘草云々　同じような生活があるものだと苦笑しています。仏縁うすく、繋特の心地を覗う由もありませんが・・・

憲雄資料館のように君の書いたものを保存するばかり、折角の御好意に答えもせずに経過しましたが　今度は精読翫味したいものです。有難うございました。

掘り残した牡丹三株、開花の時が近づきました。その時にはお知らせしますから　奥様と共に御来駕下さい。

四月二十一日　明海　憲雄様

★1981 12 30　原田憲雄宛。葉書。墨書。

幻の葡萄第二巻四四六頁までの分　確かに入手しました　新年の初仕事として此方の日記と対照します

書斎を二階に移しました　半月がかりの大移動でした　顛落にそなえて手すりもつけました　昇降は大儀ながら

足の運動にはなろうかと存じます　十二月二十九日

プラクリティー

1991 10 21　原田慶

九月二十二日に彼岸の法要を営んだ。法話は「プラクリティー」という女の人のことだった。『マータンガ経』をはじめ『首楞厳経（しゅりょうごんきょう）』など幾つかのお経にみえる話だそうである。お参りの人達がみな熱心に聞き入り、それにつられてだろうか、むつかしかったのに、小さな子どもまで身じろぎもしなかった。

話そのものは、すでに昭和七年に幸田露伴さんが、ちかごろ瀬戸内寂聴さんも取り上げておられるから、わたしが書く必要もないのだけれど、聞いた感動を無駄にしないため書きとめておきたい。法話では、それぞれの人物や、インドの階級制度についての注釈も加わり、ずいぶん長かった。そのあたりは適当に端折っておく。

お釈迦さまがコーサラ国の祇園精舎におられた時のことです。この国のプラセナージット王が、父の命日に、お釈迦さまとお弟子の全員を招いて供養しました。皆が出かけて留守になっ時、他の信者の招待をうけて出てい

たアーナンダ（阿難陀）は、帰ってきたが、供養を受けられません。そこで一人で、街へ托鉢に出かけました。

アーナンダは弟子のなかでも若く、お釈迦さまの従弟ではあっても三十ほど年下です。やはりお釈迦さまの弟子となったデーヴァダッタ（提婆達多）がアーナンダの兄で、兄が頑固で怒りっぽく悪人とされるのに対し、弟は穏やかでやさしく、たいへん賢く、よく気のつく人でした。やさしいといっても、柔弱なのではなく、背のすらりと高く、恰幅のある美男子でした。アジャータシャトル（阿闍世）王の悪象が酒を飲まされ、お釈迦さまを殺そうと暴れて突き進んできたことがあります。大勢の他の弟子は恐れて逃げたのに、アーナンダひとり、お釈迦さまの前に、象に向かって立ちはだかったので、悪象も驚いて退いた、というほど男らしい一面もあったのです。後にはお釈迦さまの侍者として常につきしたがい、身のまわりの世話をしました。お釈迦さまの育ての母親マハープラジャパティーが出家したいと願ったとき、お釈迦さまは女人の出家を許されないのを、とりなして、仏教教団に初めて比丘尼を誕生させたのも、アーナンダであったのです。人の世話をするのに忙しく、そのため自分自身の悟りを開くのが遅くなった、とも言われ、お釈迦さまの最後の旅にも従い、亡くなった時そばで泣いていて先輩の長老にたしなめられたことも、よく知られています。

さて、一人で托鉢に出たアーナンダは、師の教えにしたがい、どの家も平等に、順々に廻って行きました。弟子のなかにもいろんな人がいます。悟りを開いたお釈迦さまを最初にみたというスブーティ（須菩提）は、金持や貴族の家ばかり選んで托鉢しました。かれらはじぶんが偉いと思っているため、真実の道に入りにくい。だから布施の功徳を積ませてやらねばかれらは救われない、と考えたからです。仏弟子の上首といわれるマハーカー

シャバ（大迦葉）は、貧乏な家を選んで托鉢しました。かれらはその日の暮らしに追われ苦しんでいて、道を知る機会が少ないので、托鉢によって仏縁を結ばせたいと思ったからです。お釈迦さまはこれを聞いて、どちらも平等でないからいけない、といつも言っておられたのを、アーナンダは心に止めていたのです。

この日は、ことに暑い日でした。朝からずっと街を歩いても布施する人がなく、疲れて喉がからからになりました。アーナンダは、水を一杯めぐんでほしいものだと、捜していますと、わびしい家の間に井戸らしいものが見えました。行ってみると、若い女が瓶に水を汲んで帰ろうとするところでした。目のきらきらとした、若くて健康そうな美しい娘です。

「その水を一杯、布施してください」

アーナンダが頼むと、娘は、

「やさしい御用ですが、わたしはマータンガ種の女。身分の高い方に水をさし上げることはできないのです」

と断わりました。インドでは、バラモン教のきまりで、社会に階級（カースト）が分かたれています。バラモンが祭祀者で最高、次がクシャトリヤで政治家や軍人、三番目がヴァイシャで商人や農民、その下がシュードラ、これは奴隷です。はじめは四つでしたが、そのうちチャンダーラ（旃陀羅）という階級外の者を差別し、人間以下の動物扱いでした。マータンガというのは、このチャンダーラの一種で、かれらが上の階級の人と接触するのは汚すこととされ、ひどい報復を受けるので、布施もできないのです。それを聞いたアーナンダは言いました。

「生まれつきによって貴いものや賤いものの区別などないのです。人はみな平等です。わたしのお師匠さんは

いつもそうおっしゃっています。気にしないで、さあ、その水をわたしに布施してください」

プラクリティーはマータンガ種として、街を行くとき人が自分に触れないよう鈴を振って歩かなければならない立場で育ってきました。アーナンダから、人はみんな平等なんだと聞かされ、驚きました。そこでまずアーナンダの足と手を洗い、水をお椀に入れて差し出します。アーナンダはおいしそうに飲みました。そして、

「ありがとう、それではあなたもお元気で。たまにはわたしのお師匠さんのお話を聞きにいらっしゃい」

と言って立ち去りました。

プラクリティーは、生まれて初めて、人はみんな同じなのだと聞かされ、自分の差し出した水をおいしそうに飲んだアーナンダの美しい姿にぼうっとして、すっかり好きになり、忘れられなくなりました。そしてアーナンダのお嫁さんになりたいと思いました。プラクリティーは、そのことを母親に話しました。母親はあきれて、

「おまえは何を言うんだね、わたしたちマータンガ種の者が、尊い方の嫁になれるはずがない。そのうえあの人は出家、結婚なさらないんだよ。夢みたいなこと、いうもんじゃない」

ととりあってくれません。プラクリティーはそれでもどうしてもあきらめられず、アーナンダのお嫁さんになれないなら死んでしまう、とだだをこねました。仕方がなく、母親も折れて、娘のために、マータンガ種に伝わる呪術を使ってアーナンダを迷わせることにしました。庭に牛の糞を塗って茅（ちがや）を敷き、火を燃やし、呪文を誦えながら、火のなかへいろいろな香や花を投げ入れて祈るのだそうです。祈りがきいたのか、精舎にいたアーナンダはふらふら夢遊病者のようにプラクリティーの家にやって来ました。部屋をきれいにして待ち構えて

いたプラクリティーは大喜びで迎え入れます。しかし危ういところで気がついたアーナンダが驚いて、助けてくださいと祈りますと、アーナンダの苦悩を見通されたお釈迦さまが、神通力でマータンガ種の呪術を破られます。アーナンダは正気を取り戻して、精舎へ飛んで帰りました。

諦められないのはプラクリティーです。翌朝はやく起き、きれいにお化粧し、美しいきものを着飾り、精舎の門前に行き待ち受けます。アーナンダが托鉢に出てくると、着飾ったプラクリティーが、ついて歩きます。次の日も、次の日も、どこまでも、どこまでも、ずっとついて離れないのです。困ってしまったアーナンダは、そのことをお師匠さまに話しました。そこで、お釈迦さまは、プラクリティーを呼んで、たずねます。

「あなたは、どうしてもアーナンダの嫁になりたいのかね」

「はい、そうです」

「それではご両親を呼んできなさい」

両親を連れてきますと、娘さんがこんなことを言っているが、それでよいのか、と確かめられました。

「はい、お任せいたしますので、よろしくお願いいたします」

それを聞くと、両親を立ち去らせて、お釈迦さまはプラクリティーにお訊ねになります。

「あなたは、アーナンダのどこが好きなのかね」

「はい、目も、鼻も、口も、どこもかしこもみんな好きなのです」

「アーナンダは、今は若いから、そのように見えるだろうが、年をとれば、たちまち衰え、醜くなる。いつま

でも同じでいられるものではない」

どんなに言われてもプラクリティーは聞き入れようとしません。

「どうしてもアーナンダと共にいたいというのなら、アーナンダと同じように出家し、修行しなければならぬ」

「それでもかまいません」

お釈迦さまはプラクリティーを比丘尼にしてやり、アーナンダのとりなしで先に出家していたマハープラジャパティーに、面倒を見るようにおっしゃいました。出家はしても元は王妃だった老尼は、マータンガ種の女と生活を共にしなければならなくなり、誇りを傷つけられ、困りましたが、お釈迦さまの命令で仕方がありません。

それよりももっと困ったのは、信者であるバラモンや、王家や、金持の人々です。かれらが社会的にいかに高い身分であっても、出家者にはその足を頂いて礼拝するのが、インドの習慣です。マータンガ種出身であっても、出家したプラクリティーに対しては、同様に拝まなければならないのです。国中が大騒ぎになりました。

お釈迦さまは、いろいろな説法をされ、前世ではプラクリティーがバラモン族の娘であり、お釈迦さまがマータンガ種で、アーナンダがその子であり、マータンガ種のアーナンダとバラモン族のプラクリティーが結婚した因縁を説かれたので、信者たちはついにお釈迦さまの教えに従い、人を差別しなくなりました。プラクリティーも修行に励み、悟りを開きました。このようにして、一人の女性が、彼岸に渡ることができたのです。

人間はみな平等です。だれもみな、同じ生命をもっているのですから、大切にされなければなりません。わたし達もこころがけて、日々に努力したいと思います。

法話は、だいたいこのようなことであった。わたしはプラクリティーの勇気と熱情と素直な心に感心した。そうなるべき資質をそなえていた人、因縁をもっていた人なのかもしれない、と思った。彼岸に渡るとは、死んで浄土に行くことばかりではなく、この世で渡らなければならないものだと、考えさせられた。プラクリティーは、アーナンダの言葉を素直に聞いて、自分の生命に気づき、古い習慣を破って両親のもとを飛び出した。そして、釈尊の教えを理解し、真実に目覚めることができた。その道筋は重要だと思う、このお経が、社会の階級制度のことだけを言っているのではなくて、人間の生命そのものを考えさせているのだということが、当たりまえのことなのだけれど、わたしはよく考えて、やっとわかった。

先日、小学校に勤めているひとを訪ねて、。同和教育の冊子をもらった。その一節。

ひとりひとりの子供を大切にするためには、その子その子にあった指導方法を工夫する必要があります。その人権を大切にし、その子の生きがいにつながる指導をしてこそ、本当に生きた指導だといえるのです。

世に貧富の差はなくならないし、外見的な違いは当然あるけれど、それを人間の価値の基準にしてはいけない。生命の重みに差はないのだということを知らせるのが同和教育だろう。わたし達が差別観に捕われることは、お釈迦さまが法を説かれた二千数百年も昔から今でも、ほとんど変わっていない。学校で同和教育に力を入れていても、子ども達にいじめや自殺などが多いのは、人間がますます差別する傾向をむきだしにしてきたからだと思う。尊いのはひとりひとりの生命であって、外に現われた形ではない。お釈迦さまの教えは、わたし達に毎日新しい、変わりようのない真実であり、わたし達にとっていちばんむつかしい課題なのだと思われる。